

滿洲の旅みやげ

武田雪夫

一、まへがき

私は、この春の四月から七月にかけて、滿洲國をはじめとして、蒙疆、北支の各地を歩いて來ました。その三ヶ月に亙る旅の中に記した、幾冊ものノートの中から、少しでも興味のある話を、あれこれ拾ひ出して見ようと思ひます。

二、黒服の女

ハルビンの繁華街、キタイスカヤ街でありました。まだ、人通りも少くならない、夜も浅い頃でした。

私は、さある一軒のコーヒー店に入らうと思ひました。するに、入口の扉が靜かに、ひそりで開きました。驚いて、よく見ますに、うす暗い扉のかげに、一人の年をまつた女が立つてゐました。

見れば、その女は、眞黒な服を着て、頭には眞赤な布を冠つてゐました。そして片手には、曲つたステッキを持つてゐたやうでありました。

それこそ、外國の童話の本の挿畫にでも出て來さうな姿であります。

——白系ロシア人か、いやユダヤ人であらう、と思ひながら、私は急いでズボンのポケットに片手を入れて、いくらかの金を取出して與へました。

その黒服の女は、私に貰つた小錢を握つた手を少し持上げて、丁ねいに頭を下げました。私は何だか、童話劇の一場面に出演してゐるやうな、妙な氣持になりながら、そのステップをのぼつて行つたのであります。

そして、椅子に腰を下して、コーヒーを命ずるに、私は今の乞食と日本内地のそれとを比較して考へてゐました。それは比較するまでもない、祖國もなく、その位置まで轉落した、この土地の乞食こそ、最早いかにしても浮び上ることは不可能なのであります。

彼等に、いくばくかの金を恵むのは、その點から言つても、單なる旅人の淡い感傷の心からばかりではないのであります。唯一の安住の地として、こゝに細い生活の糸を紡いでゐる彼等、一生いまの生活を抜切れない、運命として決定されてゐる彼等であることを思はずにはゐられなかつたのであります。

### 三、靜かな交歡

北滿の開拓地は、青少年義勇軍の訓練所と同様に、あちこち幾つも訪れましたが、これは圖佳線の牡丹江と林口との中間、仙洞の開拓地を訪ねた時の話です。

開拓團の部落は鐵道線路の東側にあり、西側には一寸した滿洲人部落が、小さな屋根をならべてゐるのであります。そして、線路のすぐ東側には、何本かの鐵條網が張つてあつて、開拓團の部落の境界になつてゐました。

従つて、兩方の部落の者が交通するには、南か北へ、何丁か行つて、その踏切のミところからでなくては不可能で、鐵條網の下をくゞれるのは、小さな犬位のものであります。

開拓團の農家と農家との間から、畑と鐵條網と線路と、それを越えた向ふの滿人部落を一しよに眺めながら、私は開拓團の部落の中の道を靜かに歩いてゐました。

線路のこちらの鐵條網のところに、一人の滿人の幼い子が立つてゐるのが見えるに、私は立止つたのでした。その子は、小さな手で鐵條網の鐵線につかまつて、それを上下にゆすぶりながら、何か意味も解らぬ叫聲をあげてゐました。

何の氣もなく私は、また歩き出さうとしたのですが、そのまゝ足をさめて、だまつて眺めてゐました。滿人の子の叫聲を聞きつけたやうに、一人のやはり小さな日本人の子が、開拓團の農家から、あぶなつかしい足ざりで駈出して來

たからでありました。

やがて、日本人の子は、畑の中の細道を一二度膝か手つきながら、やつと鐵條網のまころまで行つて、二人の幼兒は、お互に近づきました。するま満人の子が、片手を鐵線の間から、日本人の子の方へ突出して何か言ひました。

するま、こちらにゐる私には、よく見えなかつたけれど、その満人の子の手に、日本人の子が、すぐに手を觸れたらしく、満人の子が、顔中で笑ふのが見えました。

思はず、持つてゐたカメラをケースから出して、二人の子の方へ近づいて行かうとした私は、すぐに思ひなほして、その二人の靜かな交歡を亂すまいとしました。

再び見ますま、二人の日滿兩國の幼兒は、おそらく何時もさうするのでありませう。同じ一本の鐵線につかまつて、何か歌をうたひながら、一しよにゆすぶつてゐるやうでありました。向ふに面してゐる日本人の子の顔は見えませんが、やはり笑つてゐる満人の子の顔から、樂しさうに笑つてゐるであらうこまほ、容易に想像出來ました。

私は、その可憐な風景を、小さな日滿の兩國旗が一しよに打振られてゐるやうに、また春風にはためいてゐるやうにうれしく感じながら、歩き出したのでありました。

そして、出来るだけながく汽車の來ないやうに願ひました。なほ、あの子たちが、何丁も歩いて踏切のまころまで行かれるやうに大きくなる日が、一日も早かれま念じました。いや、滿人部落と開拓團との間の鐵條網の除去られる日こそ、一日も早かれま祈つたのでありました。

それは、丁度、北滿の春も、やうやく深い五月の頃でありました。今は、あの邊も秋深く、清涼の風が吹いてゐるこまであらうま、私は秋の立ちそめた自分の書齋で、過ぎし旅の思ひ出をなつかしんでゐるのであります。

（皇紀二千六百年初秋「積木の家」にて）